

# 放流技術開発事業（抄録）

## （ ヒ ラ メ ）

吉尾二郎

放流魚の再捕状況から放流ヒラメの移動・成長・天然魚との混獲率等を明確にし、人工種苗放流の有効性を検討するとともに、現在のヒラメ漁業の実態を明確にしようとした。本調査は国の栽培漁業技術開発事業の一環として行ったもので、詳細は放流技術開発事業報告書（ヒラメ班）を参照されたい。

### 概 要

#### 1. 放流追跡調査

- 1) 昭和58年度放流群（人工）の現在までの再捕率は0.215%と低く、越年後の再捕が少ない。一方、天然未成魚の再捕率は5.2%と高い。移動は昭和58年度放流群（人工）については明確でないが、天然未成魚は西方沖合に移動する傾向にあった。
- 2) 昭和58年度の無標識放流魚（人工）を無眼側色素異常をもとに調査した。その結果、放流域沿岸の漁獲ヒラメのうち1.3～2.6%、沖合漁獲ヒラメの0.3～0.8%に異常が認められた。移動傾向は天然未成魚同様、西方沖合への移動が顕著である。

#### 2. 漁業実態

- 1) 放流域周辺漁協のヒラメ漁獲量は、所属する底曳漁船の数に左右される。
- 2) 海区別CPUEは大社沖合で高く、季節的には春と秋～冬に高まる。